平成28年5月1日（日）三重県文化会館中ホールで開催された
IVANさんの講演会内容を全文掲載！

違和感だった『体の疑問』

はじめまして！私の名前はアイバンと申します。講演会は初めてでデビュー講演会です。今日はテレビとかではあまりお話しできないセクシュアルマイノリティ※1について、私の経験から思うことだったり、これからの日本の社会が考えるべき『セクシュアルマイノリティ』などのお話をしたいと思います。どうぞ私のお話にお付き合いください。よろしくお願いします。

まずプロフィール。私は奈良出身です。お母さんはメキシコ人でお父さんはスペインと日本のハーフ。母と父とはメキシコで知り合いました。私は父のことは知らないんですけど、母が言うには私は父にそっくりだそうです。身長が高くて色白でイケメンで…私もメンズの頃はイケメンだった！（笑）私を妊娠した後…そこで父が既婚者であることを知ったそうです。父は「２人目はいらいない」と言ったそうですが、母は「そんなことを言う男より次生まれてくる子を選ぶ」と。母も家族も女の子が生まれてくると思って準備もしていたそうですが、なんてことか、生まれてきたらアクセサリーがついていた！あれ？男の子が生まれてきちゃったと。今私は自分の出自をネタにしていますけど、母はその時に私のことを男の子であっても女の子であっても愛そうと思って産んでくれたんです。

それから一緒に奈良に越してきて、それから埼玉県の草加市に引っ越したんですね。セクシュアリティについてまず感じたことは『体の疑問』だった。子どもの時の最初の疑問は、女の子のお友だちは「ピンクのキキとララ」だったり「ヒラヒラしたキティちゃん」の水着を着ているのに、なんで自分はパンツなんだろうと。ある日母に「ママ、なんでアイバンはパンツなの？」と尋ねたんですね。そうすると母は「あなたはね、特別な女の子なの。」と答えてくれました。なるほど、今思うと小さい頃から母はこの子は『トランスジェンダー※2』もしくは『性同一性※3』の子なんだなとわかってたと思うんですね。母は小さいころから私を一度も否定したことはなかった。

小学校にあがってから、言われて一番ショックだったことは『外人』『オカマ』。私の場合ダブルパンチだっ

た。ショックである反面、「みんなと違うんだ」「外人なんだ」「オカマちゃんなんだ」という頭になったんです。それというのも母が「あなたは特別な女の子なの」「みんなと違っていいの」と全てをプラスに変える育て方をしてくれたので、あまり気にならなくて違いを感じずに育ってきたからなんです。

３年生の時に私のことを好きな女の子ができてすごくとまどったんですね。私は男の子の体なんだけど、たぶん彼女が好きなセーラームーンと私が好きなセーラームーンは同じで、私は別にドラゴンボールは好きじゃないし、お兄ちゃんとファミコンで遊びたいとは思わなかった。やっぱりリカちゃんやバービーちゃんが好きだったし。一番最初におねだりしたクリスマスプレゼントはバービーちゃんだったんですね。母に「サンタクロースに頼む」と言ったら、「たぶん車かなんかじゃない？」と言われたんですけど、起きたらバービーちゃんが枕元に置いてあったんです。周りから否定をされていた分、家の中では私のセクシュアリティをすごく尊重してくれてた。

うちの母ってすごくファンキーなんですね。４回結婚しているんですよ、ファンキーでしょう？私は３回離婚しているとは言わない！４回結婚してる、プラスの言い方でしょ？今私はその母に似ているんですけど（笑）。父の中には、私のセクシュアリティを受け入れられない人もいた。母がいないときに「おい！オカマ！」「オカマみたいな歩き方してんじゃねーよ！」って言われたり…。でも母には言わなかった、「ママは気づくだろう」と思って。案の定気づいて離婚しましたけど。小学校の時が一番『体の疑問』、「なんでちんちんついているのに女の子のものが好きなんだろう、なんでちんちんついてるんだろう」ほんとに素朴に子どもが思う疑問を持っていた。

どんなことをしても『性別を隠したい』

それが今度中学校へあがると思春期に入ります。もう思春期大変だった！中２のときに沖縄アクターズスクールに入りました。男の子とレッスンしていると「なんで私はメンズのダンスをしなきゃいけないんだろう、あっちで女の子たちと踊りたいのに」って、ずっと「なんで？なんで？なんで？」って、その想いがすごく強くて。

うちの学校はブレザーだったんですけど、３年間に制服を着たのはイベントの時だけ、後は毎日ジャージを着ていました。１・２年の時は先輩たちから「あの子、男なの女なのどっち？」って言われて「実は家の事情で男の格好しなきゃいけなくて」と答えてました。全然そんな事情ないんですけど。小学校の時は『疑問』だったんですけど、中学校ではとにかく『性別を隠す』、本当に隠したくて隠したくて。そこから「女の子の格好をしたいな」と女の子に近づくことに徹していきました。友達も女の子しかいなかったし、初恋の人も同級生のサッカー部のキャプテンだったり。私の時代ってまだ男女がはっきり区別されていたんですが、３年生の時大きな事件がありまして。組体操の時に男の子は上を脱ぐんですね、私はとにかく上を脱がないために、仮病を使って練習や運動会を休むとか応援に徹するとかして、なんとかをやりすごしてました。でも３年生の運動会の時に担当の先生に職員室に呼ばれて

「なんで組体操でないんだ？」

「上を脱ぎたくないからです」

「なんで？」

「なんでって…」

「じゃあ下脱げ」

…と言われたんですよ。「は？」ですよね、今考えると変態でしょ？「組体操をやりたくないんだったら、お前が女だって証拠を見せろ」と。今なら大問題だけど、そこは中学生の当時やっぱり逆らえなかったし、何より好きな彼も組体操をやっていて、「男の子って知られたくない」「上を脱いで彼と同じ“男”になりたくない」っていう強い思いで先生に下半身を見せたんですね。下半身を見せたことですごく傷ついたけど、そうすることで組体操に出ることを回避できたことは私にとってすごく大きいことでした。そこまでしてでも私は自分の裸を見せられなかった、他の男の子と同じように裸を見せられなかった、でもその想いを貫き通せたんですね。冒頭の挨拶にもありましたけど、１３人に１人はセクシュアルマイノリティの人がいる。私セクシュアルマイノリティの人は大体わかるんですけど、同じクラスに２人はいたんですよ、絶対。その子たちはやっぱり周りや世間体を気にしたり、「いじめられる」「言えない」「恥ずかしい」という気持ちがあったんだと思う。上を脱いで組体操に出て、“男”っていう本当は着たくない鎧を着なきゃいけなかったのかと思うと、やっぱり残念だなって。

でも私の事件があってから相談室ができて、卒業後には相談室にそういう子たちが来るようになったよって担任の先生から聞いて、良かったなって。

私はこういう性格なので、中学校の頃から周りになんて思われたってよかった、でも「私は女の子だから自分の乳房を見せるなんて絶対いやだ」とはっきりそう思えた、それを貫き通せた。それは母が教えてくれた「自分に自信を持つこと」「自分を好きでいること」「自分を貫き通すこと」「特別な女の子なんだ」って意識がずっとあったから。

ただですね、ここからなんです。中学校まではなんとかこれで済んだんですね。自分を貫き通して髪型も女の子みたいにして、女の子たちと騒いでそれでよかったんです。私が行った高校がやんちゃな学校だったんですね。入学するとこういう性格もあって先輩たちにすごい気に入られたけど、一番最初に言われた言葉が「おまえオカマじゃねえよな」だったんです。「え…ウッス…」しかなくて（苦笑）。そこからが…生まれは男ですよ、でも心は女、いつかは女の子になりたいって思っているのに、高校生になってまた男にならなきゃいけない、“男なのに男”と偽らなきゃいけない、この、たぶん当事者じゃないと分からないと思うんですけど、すごく難しくて。とにかく私は高校の３年間男になりました。髪型も短髪で金にして学ラン着て先輩に合わせて、女の子に好きって言われたら「ごめん俺いっぱい女いるから付き合えねえわ」ってなんとかがんばって回避して。そうして高校１・２年頑張りました。すると母が海外の人と再婚して移住しちゃったんです。これはチャンスだと思って、そのままアメリカに飛んだんです、一人で。親戚のおばさんの家にホームステイしてアメリカの学校に進学して自分でアルバイトして学費を払って。でもアメリカはもっと大変で…。私はもっと私のセクシュアリティを受け入れてもらえる国へ行けると思ってた、でも大間違い！アメリカの高校って、ゲイ、ポピュラー（人気のある男の子たち）とはっきり分かれていて、ゲイの子たちで確立していて。そこに入る勇気がなくて。今度は

アメリカでまた１年、男としての生活を始めましたね。私が行ったのはカリフォルニアだったんですけど、そこではゲイカルチャーが発展していて。でもそのカルチャーに入るにはバリアが張られててすごく難しくて。私の年齢ではその中に入れなくて。「なんてもどかしい生活をしないといけないんだろう」と思って。アメリカでも結局女の子として生きることができなくて、そのまま１８歳になって卒業しました。

矛盾と葛藤を抱えて

　そうして保育士になりたかったのもあって日本へ帰りました。帰ってきてバイトを始めて、じゃあそこで名物店員になっちゃって…イケメンがいるって。女の子からお手紙もらって「ありがとうございます」って、ほんとは男の子から欲しいのに…くれないよね！

　実はプロ目指しながらロックバンドの活動もしてて。そのライブで有名なモデルエージェンシーの方が見に来ていてスカウトされました。その３ヶ月後にはコンビニに並んでるファッション誌すべて制覇してて。自分が誌面に載ってるのを見て「これ私？私なの？」って。でもただメンズなんですよ、すごく複雑で。確かにありがたいし有名になってる、だけど…。でも私は隣に並んでる女性誌に出たいし、でも自分が載っているのはメンズ雑誌で…わかる？笑うよね？出てることに自分は違和感を感じて、でもその時はとにかく数をこなす、違和感を感じてる中でのお仕事だったんですね。私はモデルのお仕事始めた時から体を変えたい、どんどん変えていきたいって気持ちが膨らんでいて。お仕事で女の子のモデルさんの腰に手を回してとか言われると「なんで私がこの女の腰に手を回さなきゃいけないのよ！」とか、顔近づけてって言われたら「やだなんでよ！」って…「もっと男の子よこしてよ！」って（笑）。でもそれが誌面に出るし、それがお仕事だったし、モデル事務所の社長に言われていたのが「モデルはしゃべらない役者だから男を演じなさい」と。社長は知っていたんですよ、私がトランスジェンダーだってこと。まあ私は歩くカミングアウトだったので、現場に行くと「姫入りましたー」って。みんな知ってたんです、モデル業界では。あの子はそういう子だからって。笑うよね？

　でも誌面を見てる人は、かっこいい！ＩＶＡＮイケメン！って。原宿歩いていると男の子から「ＩＶＡＮさんめっちゃ好きです！」って言われて。「えー？私のこと好きなの？」と思ったら「めっちゃリスペクトしてます。ＩＶＡＮさんになりたいです」「あ、そっちか」って。なんだろう、ようは憧れ？男の子が男の子として憧れる存在になっていくことが、またこれが私の中ですごい葛藤で。私は大人

になったら女の子になりたい、ちゃんと男性ともお付き合いしたいって決めてたので。自分がどんどん男性化していくことが複雑で。それもあって女性ホルモンを始めることができなかったんですね、肉付きも良くなるし女の子の体型になっていくし肌も変わる。そこはどっちをとるか…自分がメンズモデルとしてやっていくのか、今を捨てて女の子になるのか。パリコレ行く前すごく迷った時期もあって、このままモデルとしてやっていくのかそれとも新宿で働くのか、ほんとに悩んで。でもその頃私も若くって…ぶっちゃけモデルの生活って華やかでした。チョー華やか！撮影して夜はシャンパン飲んでパーティー、服ももらえるし金も貯まる。何これ？！って（笑）。最高だったんですけど…でも、なんだろうな…その時間っていうのが私の中では全然キラキラしていなくて。ただ日にちを削ってく、年を重ねてく、男の子として何とか１日を全うしていくのが毎日の目標っていうか。今日も男として大丈夫だった、今日も男としてできた、今日も男としてかっこよくできた、今日もロックに決められた、今日もＩＶＡＮさんみたいになりたいですって男の子に言われたって…「はあ」って。毎日ベッドに入って思っていたことが、「なんで私ついてるんだろう」って、うん。その時は母とも家族とも一切話してなかったんです。その時母に、無理しちゃだめだよ、あなたは特別な女の子、自分に自信を持って自分を愛しなさいって言われたら、たぶん崩れちゃうと思ったんですよ、メンズモデルとしてのＩＶＡＮが。

だから私は家族と一切連絡を絶って、私をメンズモデルとして称えてくれる人たちとだけ付き合おうと思って。母とも３年くらい口きかなくって、仕送りはしてましたけど。連絡来てもすべて無視、母が心配して日本に来ちゃうくらい。

でもやっぱり続かなかったですね、私はパリコレが限度で。パリに行こうと決めたのも、メンズモデルになっていく自分が、ここまできたら男として頂点極めなきゃと思ったんですよ。もう男としてトップまで行こうと。

ただその頃知り合った男性がいて。同じモデルでその子は女子しか愛せないという人で。初めてちゃんと男性に告白しました。彼もどこかで芽生えたというか、試してみようと思ったというか…「う〜ん、アイバンだったらいけるかも…」って。結構多いんですよ、こういう男性！気をつけないと（笑）。当事者だったらわかると思うんですけど、付き合うとかではなくて一緒にいる、そういう関係になる、恋人みたいなやり取りをしているんだけど、いざ「私たちなんなの？」って聞くと「わからない」ってなる、すごく多くてこれが。でもそれってこっちの気持ちにあっちがまだ答えられない状況なんですよ。やっぱり肉体的なこと。彼にすごく言われていたのは「俺アイバンのことすっごい好きなんだよ、一緒にいたいんだよ、でも“何か”がストップをかける」。その“何か”は彼は絶対言わないんですよ、でも私はわかってる、体でしょ。セックスでしょ。でもたぶんそこがすごくセクシュアルマイノリティの、特に私みたいな性同一性の人には多い葛藤で。彼は私より先にパリコレに出ていたんですね。私は彼と一緒になりたい、同じところに行きたいって、追っかけるように同じタイミングで、その時の仕事を全部蹴って、一か八かでパリへ行きました。オーディションいっぱい受けてギリギリのところで合格してショーに出て。万々歳ってなったんですけど、その時に「ああ、もういいかな」って。男の子の美として頂点極めちゃった、もういいかなってその時に思ったんですね。変な話男の子としてやっていくのがすごく疲れたんですよ。モデルの職業柄まだ楽だと思うんですけど。たぶん社会で男として女として生きる、それが大変な当事者の人はいっぱいいると思います。毎日スーツを着て男の格好して会社に行かなきゃいけない、毎日女の子の格好をして髪長くして「おはようございます！」って、セクハラされたとしても女として会社に行かなきゃいけない、心は女なのに、心は男なのに。日本にはすごく多いと思う、そういう人。私はそれのモデルヴァージョンですね。もう駄目だって思った。「上脱いでください」って言われても

「ファッションだったら脱ぐわ」と思って脱いでたんですけど、だんだん恥ずかしくなってくるし。彼にも言われたんですよ「ごめん、俺やっぱ女好きだわ」って。その言葉がすごくショックで…。パリでも一緒にいていい感じだったのに、日本に帰ってきた瞬間に「ごめん」って言われて、私と別れたというか、そうじゃなくなったらすぐに女の子のモデルと付き合いだしちゃって。ああ、やっぱり女の子に負けちゃうんだと思って。

　それから私は何か違うことをしようと思って音楽へ行きました。ＣＤ出してみないって誘っていただいて。でもこれがまた複雑で。ビジュアル系ですよ、皆さんビジュアル系ってわかります？メイクして女の子の格好して。それがね、私はやっとぶっちゃけ女の子の格好ができてメイクもできて歌も歌える、やっとなんか自分が向かっている方向に行けると思って。やります！ってＯＫして契約してＣＤ出してライブとかすることになって。でもその時プロデューサーに「アイバン、女の子の格好してるけど女の子を愛して」って言われたんです。「はい？エクスキューズミー？」てなって。「いや今女の子の格好してるじゃん、きれいじゃん、それを美しい、かっこいいと思って、アイバンに恋をしてくるのは女の子だけだからね、ファンは」って言われて。「？？？」ってなって。女の子の格好してます、女の子に僕はきみを愛してるよって言わなきゃいけない、なにこの矛盾と思って。「待って待って待って、やっとやっとやっと女の子の格好ができてメイクができて仕事も変わったのに今度は気持ちの問題？今度は気持ちを無理しなきゃいけないの？」って。今まではね、メンズモデルだったからメンズの格好して、まあしゃべらない役者だからカメラの前に立っていても心は「やん！」って女の子の気持ちでもよかったのに、今度は女の子の格好してメイクして女の子を愛する、なにこれ？って。そこは意見の食い違いですよね、もう。それは、私はできない、気持ちを変えることはすごく難しいことだし。例えば、当事者の私が母に「男の子なんだから男の子らしくしなさい！」と言われてもできないもん、だって心は女の子だから、男の子らしくなんて絶対できない。「女の子なんだから女の子らしくしなさい」って言われても、できねーよ！だって心が男の子なんだもん。絶対性同一性の子はそう思うし。またゲイの子はちょっと変わってくると思うんですけど。やっぱり心を変えるなんて絶対無理な話だから、だったら私はできないと思って失踪しちゃいました。もうね、世捨て人みたいになろうと思って。全部捨てて失踪したんですね、私。２３、４歳くらいだったかな、その時住んでた寮も出て、その時好きだった人ももう全部縁を切ろう、全部真っ白にしたいと思って。鞄に少しの食料と貯金と服を入れて、ホームレスの人たちに「すみません弟子入りさせてください」って。そこからまあ段ボール集めて陣取りから始まってガチなホームレスをやりました。でもその時も男っていう体が、ホームレスであっても…なよなよしてたのかな？「おまえこっちだろう」とか「おい兄ちゃん、よかったらどう？」とか言われちゃって。やっぱり心は女の子だからホームレスやってもどこかで心が折れちゃうんですよね。やっぱりこんな汚い生活やだとか、シャワーあびたいとか、やっぱり私弱いんだわって。その頃兄が日本から連絡してうちの母が探しに来ました。アイバン見つからないって、いろんなとこ探し回ってくれていました。私がたまたま誰かを頼ろうと地元に帰り、子どもの頃よく行ってた公園でゴロゴロしてたら奇跡的な再会で。母が帰る４日前で、すぐにそこでドミニカに行くチケットを手配して母と一緒に行くことになりました。一回自分の気持ちを整理しなきゃいけないなと思って。私、母に再会した時号泣しちゃって、止まらなくて涙が。もう１時間くらいどっから水分出てくるんだろうって言うくらいずっと泣いてました。もう男の子としてやっていけない、男の子として社会では生きていけない、男性っていう性では日本では生きていけない、はっきり思いました。男性とつきあいたいし結婚したいし、女性の格好したいしメイクしたいし…うん、女の子の生活がしたいし。もう私は耐えられなかったんですね。母に会った瞬間に、子どもの時から私のセクシュアリティを否定してこなかった母、子どもの時から「あなたは特別な女の子なんだよ」

「自分のことを好きになりなさい、愛しなさい」「まっすぐ生きなさい」「嘘なく生きなさい」って言ってくれた母を見た時に「私どんだけ我慢してたんだろう」って。男の子として生きていく我慢、特殊な世界で生きていたにも関わらずここまで自分をセーブしてこなきゃいけなかった生き方、たぶん他の、ちゃんと役職についてる人だったり、会社に勤めている人はもっとつらい思いをしてるんだなあと思うんですよ。私は結構自由な世界だから、好きな格好しても「ファッションだ」って言ってしまえば終わりだし。それでもどれだけ自分を押さえつけてきたんだろうって、母に会って思いました。

嘘なく生きる

そして今度はドミニカ共和国ですが、いや～これが…南米はもっと厳しい。ドミニカって昭和の日本みたいで、私がいたところはちょっとなよってしてるだけで「おーオカマ！」って言われるんですよ。ちょっと私みたいに色が白くて髪の毛サラサラでトコトコ歩いていると石投げられるくらいの勢い。そんなとこ行っちゃったもんだから、また男らしくしなきゃいけないのかと思ったら、母に「いいのよ気にしないで、この国は『私はそうなの！』ってくらいでいた方が受け入れてくれるから」と言われその通りにすると、案の定「ああそういう子なんだ」って、スペイン語ではパハロって言うんですけど「アイバンはパハロだから」と。そうすると好きになってくれる人もいたりとか。結構それが私の中では解放？自分を受け入れてくれづらい国、しかもそれを日本と違い「お前はそうだろう」とはっきり言ってくる国で、それをやってる自分がすごく楽で。そこで２年間住んで結構それも気持ちのリフレッシュになって、今までやったことのないお仕事をして。周りの人たちも、女性として見てくれるんですよ、私のことを。オネエとかそういう以前に女性として見てくれるからそれがすごく楽で。でも思ったんですよ、中途半端に芸能界辞めちゃったなあって。自分のセクシュアルマイノリティ、セクシュアリティを受け入れてもらえないがため

に、それがストレスがために中途半端に辞めちゃった。でもすごく未練がある、だってこの仕事がすごく好きだし、この仕事をしている時の自分が一番キラキラしているから。３０歳になる前にもう１回日本に帰ってトライしたい。母は最初すごく心配していました。でも私はその時心に決めてたことがあって、次日本に帰ったら女になろうと。女として生きようと。もしモデルはメンズでやったとしても、私生活では女性として生きようと。ここで『体の変化』です、体を変えようと。母にもその時言いました。「ママ私ね、体を変えようと思ってるの」って。じゃあ、なんて言ったと思います？「いいじゃない！」って。ね、このライトな感じ（笑）。この軽い感じ、なんで私もっと早く母に言わなかったんだろう、なんでもっと早くこの一言が母に言えなかったんだろう、こんなに母はライトに「あ、いいんじゃない？あなたがそれで幸せなら」と言ってくれるのに。すげえな、オカンって思ったんですよ。私がこんなに悩んでこんなに一人でわあーってなってたのに、母は私の幸せだけを考えてる。あなたがそれで幸せになるのであればそうしなさいって。そう言ってくれたことで「じゃあ日本に帰るね。最後のチャンスで日本へ帰らせて」って、母に旅費を半分出してもらって、日本へ帰ってきて、ゼロからスタートし友達のカフェでバイトしました。その時はまだ女性ホルモンも始めてなかったので、メンズなんですよ、見ためが。そこに来るママさんたちが「いや～ん、イケメン！イケメン店員さん」って、またそこが有名になっちゃって。お願い、イケメンで有名にならないでって思ったんですけど、まあ、ありがたいことですよね。でもそこで変えなかったのが『動き』。だってもう女なんだもん。でしょ？これが私の中での決意、女として生きる決意、恥ずかしがっちゃいけないと思ったんですね。隠しちゃいけない、周りから何と言われても私は私だし、私の性は私が決める。それで帰って来て半年目くらいかな、初めて女性ホルモンを打つ決意をしました。メンタルクリニックに電話して、そこで「大丈夫です、あなたは性同一性です」って診断されたので、そこからホルモン治療を始めました。最初は副作用もやばかったし、「こんなに大変なんだ女の子は」って思うくらい更年期みたいな症状が出るんですよ、イライラしたり顔がほてったりして。感じたことのない体の変化があって、それはもういつも母に電話で相談してました、「ママ今こういう体」「今こういう気持ち」すると母から「それは女の子のあれだね」「女の子はそう」「ママもそうなる時あるよ」と話してくれて。母の助けっていうか家族の助けがすごく大きくて。兄は私のことを妹と思っていて、もう子どもの頃からです、それは。弟は私がドミニカにいる時「や～ん」ってやっていると、周りは言うわけですよ「おまえの兄貴これじゃん、大丈夫なの？」って。でも何を言われても弟はそれを１回も恥じたことがなくて「そうだよ、それが何？」って言える弟。だから感謝です、ほんと。私はほんとに家族に恵まれていて、それってやっぱり家の中で創り上げる、たぶん絆だと思うので。でもそれは家族が分かってなきゃいけないし。これは番組の収録で知ったんですけど、実は母、私が小学校上がった頃くらいか…うちの子は性同一性なんだろうなって分かった時にカウンセリングに通ったらしいんですよ、こっそり。母も最初はびっくりしたらしくって、うちの子がオカマちゃんなんだってなった時に、でも「受け入れなきゃ」って思い、カウンセリングに行ったんですよ。「どうやってこの子を育てればいいですか」って。そこでカウンセリングを受けた上で、「この子の個性を伸ばしてあげる」「この子はこういう子」として“受け入れる”っていう。私が大人になった時に言ってくれたことは、私は天使を授かったと、そして世界をみればデザイナーだったり音楽家だったり美容家だったり、それこそいろんな事業で活躍している人にはセクシュアルマイノリティの方が多くて。私はなんて天才を授かったんだって自分の頭を持っていったそうなんですね。それを聞いて「うわ、すげえなオカンって」思って。

メディアに出て感じること、
私が思う“セクシュアルマイノリティ”のこれから

そういうこともあって女性ホルモンを続けて好きな人もできて、今度は芸能界へ戻る決意をして、事務所探しをはじめたんですね。今までの伝手は全く使えずゼロからだったけど、今の事務所の代表と知り合ったんですね。最初に言われたのは「アイバンは自分の性を世に出す気はない？」って。そこで相談をして番組に出ることになった。「私アイバンはパリコレに出て…トップモデルであるにもかかわらず…オネエであることを反省しに…」あー！みたいな。最初はぶっちゃけ抵抗があったんですけど、でもこれで世に出て先駆けになれればいいなあと思って出ました。司会の方に耳打ちで付き合った人を言うとか、「もうやだあー！」とかやるのも、キャラをつくらなきゃいけないのがストレスだったんですけど。それはそれでお仕事として割り切って。ありがたいことにそれで好感を持っていただくことができました。

メディアに出ていて感じるのが、日本のセクシュアルマイノリティ、ＬＧＢＴへの認識がまだまだゆるいというか、甘いというか、タブー化されているというか。私はメディアで取り上げる「オカマ」「オネエ」っていう扱い方をどんどん変えていきたいなと思っていて。だから色んな運動をしてて、ただ古い人はまだ受け入れられないんですね。そのために必要なのは私たち当事者が活動しなきゃいけない。ＬＧＢＴを美しく見せてかなきゃいけない。だからぶっちゃけ「オネエ」っていう、このタレントのやり方は私はホントは好んでないです。結構ＮＧを出します、いろんな番組で。それはうちの代表、会社もそうですけど、そこは綺麗に見せていきたいし、そこの認識でどうしても、うん…なんだろう、やっぱりどこへいっても化け物扱いされるというか。新宿２丁目※4 の人が２丁目に閉じこもってしまうのもそこから出られない、そこを出てしまったら、何か言われる、世間の目が気になる。じゃあ社会は何をしたらいいかって言うと、それを普通にしたらいいんですよ。みんな普通にしたらいいと思うの。例えば学校にそういう子がいたら特別扱いするんじゃなくて普通、みんなと同じスタンス。会社でも例えば「あいつ元女だよな」じゃなくて「同じ男」。もう性というものを越えていかないと。日本はすごくそういう面では遅れているなと思います。ＬＧＢＴをバックアップするのって、たぶんすごく日本の進歩につながると思います。ＬＧＢＴがもっともっとひろがれば、日本はもっと豊かな国になると思っています。

私はこうやってメディアに出て、「オネエ」って罵倒されても、芯を貫いた方がいいと思っていて、そうした方が馬鹿にされない。でもそういう風に見られるのってリスペクト※5 がないからだと思う。でもそのリスペクトっていうのは小さいころから植えつけていかないとできないことだから。私はすごく母にリスペクトされました、兄にリスペクトされました、弟にリスペクトされました、家の中でリスペクトは生まれます。家の中でリスペクトされた人は、外の人もリスペクトします。家の中で学ぶこと、覚えることってすごく大事で、家の中でされる扱いってすごく大事で、家の中で家族がセクシュアルマイノリティ、ＬＧＢＴの子を受け入れてあげないと、その子は絶対殻に閉じこもったままです。もし家の中でカミングアウトされた時「なんで？あなたはそうじゃない」じゃなくて、３回深呼吸して「うんそっか」って受け入れてあげる。たとえ自分の中で消化するのが難しくても、「あなたはあなたでありなさい」「自分を愛しなさい」っていうその一言、うちの母みたいに軽い感じ。それができたらどんなに当事者は楽か。そのほんとに軽い感じが、それがうそでも、もしやってもらえたら、その子は伸びます、ううん２倍伸びる、たぶん。だってのびのび生きられるから、私みたいに。

ただ、まだ日本の社会、外に出た時にどうしたらいいかって言ったら、うーん、すごく難しいです。お堅い仕事についている人はすごく難しいと思うんですけど、外でははじけていいと思う。外では女装してもいいと

思う、男装していいと思う、パートナーが男でも女でもいいと思う、その仕事が窮屈になったら辞めちゃっていいと思う、だって私みたいにホームレスになっても生きてカムバックしているんだもん。地を見た人は絶対上にのぼれるし、上にのぼって下に落ちようと思えばいつでも落ちれます。だから当事者のみんなは自分を強く持ってほしいし、自分の性を恥じて欲しくない。そして絶対『障がい』ってつけちゃいけないと思います。性同一性のお子さんを持ったお父さんお母さんは幸せだと思った方がいいと思います。そんな子なかなか生まれないんだもん。すごい特別。私、女の子になったことですごく不安定になることもあったし大変だけど、でもすごい幸せになったんですね。その時母に聞かれたの。「幸せ？」って。「チョー幸せだよ。だってやっと女子だよ」って言ったら、「もうママはそれが一番幸せ」って。やっぱり親って子どもの幸せをきっと一番に考えてると思うんです。私はホントにそう思ってて。だからきっとこの中にもお父さんやお母さんが認めてくれないんじゃないかとか、ゲイである自分がいけないのか、なんでこんな風に生まれてきたんだろうとか、みんなと一緒じゃないんだろうとか思ってる人がいるかもしれないけど、いいのそれで。それがあなたたちで、その幸せがたぶんご両親の幸せになると思う。私はねこの中から、政治家になったりとか教師になったりとか、それこそ同じメディアに出てくる…席狙わないでよ私の！オネエタレントだったりとか、いつかトランスジェンダータレントになってくれればいいなと思ってるんだけど、まだね、オネエって言い方があれだけど…。出てきてくれればなあって。なんだろうな、私は『オネエ』『トランスジェンダー』『ニューハーフ』って言われますけど、今すごく幸せなんですよ。変な話この仕事がなくなったとしても、きっと私は素敵なパートナーを見つけられると思うし、きっと私は女性として幸せに生きていける、自分を殻に閉じこめないで自分を押さえつけないで生きていける。だから頑張りたいなって思います。

まだまだ話し出したら止まらないけど、ひとつだけ会場に来てくださった方々に言いたいのは、私たちセクシュアルマイノリティの人たちは幸せに生きています。自分のことが大好きです。そうじゃない当事者のみんなは、自分を好きになってください、自分を一番に考えて自分を愛してください。そしてそのご家族はその当事者の方を愛してあげてください。すごくシンプルなことです。

『愛する』以上。

ありがとうございました。

※１　多数派とされる性のあり方とは違うアイデンティティを持つ人々のことを総称してセクシュアルマイノリティ、ＬＧＢＴなどと呼ぶことがある

※２　数多くあるセクシュアリティのうちの一つで、生まれ持った体の性別と心の性別が違うあり方のこと。

※３　体と心の性別の不一致を感じたり確信したり現象を「性同一性障がい（gender identity disorder, GID）」と呼ぶ。あくまで治療のための診断名であるにもかかわらず、まだ病気と思われていることが多く、理解が進まない要因の１つである。

※４　主にセクシュアルマイノリティの方向けのバーやクラブなどが集中する新宿区にある街の一角

※５　尊敬し敬意を表すこと

【プロフィール】

ＩＶＡＮ（アイバン）／ ファッションモデル、ミュージシャン、タレント

父が日本人とスペイン人のハーフ、実母がメキシコ人のクオーター。２歳の時に奈良へ移住。カリフォルニア州の高校に進学。卒業後帰国し、モデル活動を始める。２００４年にはパリコレのモデルに選ばれ世界のトップモデルとしても活躍。２０１３年テレビ番組で。自らトランスジェンダーであることを告白。以降トランスジェンダータレントとして活動している。